

③ 東海道という財産を持つ保土ヶ谷のまちづくり

■近藤博昭

1 東海道五十三次シンポジウムから東海道ネットワークへ

① 東海道五十三次シンポジウムと保土ヶ谷の馴れ初め

「東海道五十三次シンポジウム」：耳慣れない言葉だと思われる方も多いだろうが、東海道沿線にある街々が「東海道五十三次」を共通テーマにそれぞれの個性を活かして開催しているユニークなイベントである。

昭和六十三年から始まったこのシンポジウムが、我が街保土ヶ谷にやってきたのは、平成七年。当時は、開催地として名乗りを挙げた街が少なく、前年の開催地が次の指名権(?)を持つという不文律に則り、静岡の方が遠路遙々相談に見えたのだった。

「やろう！」乗りのいいのを信条とする私たちは、早速関係機関を飛び回り、めでたくシンポジウム実行委員会が設立する運びとなった。

企画から協賛金や補助金集め、出演依頼等々、開催にこぎ着けるまでの顛末を語ることは次の機会に譲るとして、二日間にわたるこの催しは、「水戸黄門」でお馴染みの佐野浅夫氏の記念講演、パネルディスカッション、宿場園遊会、宿場探訪浪漫の旅等々、盛りだくさん

のメニューをひっさげ、横浜市内はもちろん、東海道沿線の方々のご来場を得(延べ参加人数七百四十人)、賑やかに華やかに展開したのであった。

② ネットワークをつくる

さて、こうして、大成功のうちに幕を閉じた「東海道五十三次シンポジウム 保土ヶ谷 宿大会」だが、開催までの作業の中で、はたと気付いたことがあった。「開催通知はどこに出せばいいのか」資料が全然ない。つまり、全部自分たちで調べなければいけないのだ。

「八回目だというのは、いかなものだろう」といがないというのには、いかなものだろう」といふスタッフの声に、「じゃ、この保土ヶ谷大会を連絡会をつくる発足会にしちやおう」と、言い出しつべになったところ、各地とも大賛成。かくして「東海道シンポジウム連絡会」が誕生した。会長は滋賀県土山宿の松山町長が引き受けてくださり、事務局も土山宿の企画課と決まり、今日まで運営している。

東海道全体のシンポジウムの運営もさることながら、まず街同士の情報交換からということが始まったこの連絡会も年数が経つにつれて、災害協定を結ぶなど、ネットワーク組織ならではの活動を行えるようになった。

ちなみに、この災害協定は「役所間のやることと、民間ができること」というのは多少違うだろう。例えば、災害復興に疲れた街の人にお酒の差し入れがしたいけれど、役所ではそういう嗜好品の差し入れはなかなか難しいだろう。それは民間でやろうじゃないか」という発想で、役所間の東海道災害協定と民間の災害協定の二つが締結されている。

また、横浜市長がいち早く賛同してくださったおかげで、横浜が乗るのだったらうちもという街が十以上あり、改めて大都市横浜の影響力を認識した次第である。

③ 二〇〇一年、東海道五十三次は新たに結ばれる

二〇〇一年は、東海道に宿場制が敷かれてから四百年。東海道シンポジウム連絡会では、各地を結んだ四百年祭を画策中である。

四百年をゴールとするのではなく、一つの大きな節目とし、二十一世紀から、五百年記念―二十二世紀―に向けてのまちづくりの視点を明確にするものにと考えている。

手法としては、ある日時を設定してわっと開催するのではなく、その年はどこかしらで四百年を祝っているという形を考えており、点ではなく線になることの素晴らしさを大会

- 1 東海道五十三次シンポジウムから東海道ネットワークへ
- 2 四〇〇倶楽部から街づくりが広がった
- 3 市民が街をつくっていくことの強み
- 4 さらなる展開に向けて
- 5 おわりに―まちづくりは人づくり―

で宣言できればいいと思っっている。

2 四〇〇倶楽部からまちづくりが広がった

① ソバ屋の四代目、C-I探して保土ヶ谷宿と出会う

東海道シンポジウムに関する保土ヶ谷区での活動の主力となっているのが、保土ヶ谷宿四〇〇倶楽部である。この会の誕生に私が関わったのは、ひよんなきっかけからであった。

今から十三、四年前、ソバ屋の四代目となっていた私は、「どうもつまらない。何かおもしろいソバ屋にできないものか」とずっと考えていた。ちょうど世の中が、コーポレートアイデンティティー（C-I）に関心を持ち始めた時期でもあり、うちのお店のC-Iを探しだそうと、「桑名屋という名前に因んで、桑名の焼きハマグリとか、ハマグリに関したメニューを取り入れ、建物や器に至るまで、トータルデザインしたらどうか」とか、「将来これで飯を食おうと思っっていた野球をテーマに店づくりしたらどうか」とか、あれこれ考えていた。そして、たどり着いたのが、「保土ヶ谷の歴史」である。

そうはいっても何も知らないところからの出発で、ともかく区役所にそういう資料はありませんかと訪ねていくと、よくいらっしやいましたと歓迎をされて、あれよあれよという間に、当時、保土ヶ谷区役所内にあった東海道倶楽部が発足後三年の区切りにまとめた本を出すという動きの中に入ってしまった。フーリングが合ったというべきか、不思議

な出会いだったのである。

そうこうしているうちに、東海道倶楽部の集大成を発表するシンポジウムをしようということになり、百人入る会場がいっぱいになるぐらい盛り上がったその席上で「保土ヶ谷宿を、みんなでもっと勉強する会をつくりませんか。」と呼びかけたら、拍手も起きるし、三、四十人の人が手を挙げてくれた。

もちろん桑名屋も東海道の宿場をC-Iとしたけれど、もっと大きな「街のC-Iづくり」がこうして始まったのである。

初回には、会の名前の提案から始め、投票と相談の結果、二〇〇一年の宿場制定四百年に因んだ「保土ヶ谷宿四〇〇倶楽部」に決定。今日に至っている。

発足の盛り上がりを受け、最初の一、二年は、勉強会も毎月行い人が随分来たのだけれど、その後だんだん減っていくし、会報を毎月発行する作業も非常に大変だった。今、振り返ると、三、五年目ぐらいが一つの大きな壁だったのではないかと思う。

しかし、最初はトップギアに入っただけで、サイドに落ち、セカンドに落ち、ローにもなるし、バックギアに入っってしまう人だっている。でも、またトップギアに入る時が来るのが市民生活だ。立ち止まっても、ゆっくり歩いてもいいから続けることだ。四〇〇倶楽部も、紆余曲折はあったが、今でも活動は継続され、みんながんばっているではないか。

② 歴史を生かした街づくりの理念

四〇〇倶楽部ができたときに、歴史の勉強会だけのものにはしたくないという基本方針

があった。ここが、数多ある歴史の会や散策会とほんの少し違うところだろう。

具体的にいうと、歴史をほじくり返して千六百年に何だった、何があったで終わるものと、その歴史を価値に思っつて、次の時代にその街がどうなるのか、どうするのかという提案をするまでを活動としようと考えてるものの違いである。

歴史を生かしたまちづくりというのはそういう意味だ。古きを尋ねて、新しきを知りたい。古きを尋ねることは簡単だが、新しきを知ることは非常に難しい。けれど、自分たちの街を自分たちの責任で、論じたり創造をするということは、ある意味で夢なのだ。

まちづくりの原点というのはその辺だと私は思っている。

③ シーズを増やす

「保土ヶ谷ホット会と宿場祭りの誕生」
一方、四〇〇倶楽部に続く新しい動きを生み出す試みも始めた。四〇〇倶楽部への参加があまりなかった商店街の三、四十代の商店主に声をかけてみたのである。みんなで勉強しないか、おれたち保土ヶ谷で商売をやるのにこれじゃまずいだろうと。こうして生まれたのが「保土ヶ谷ホット会」だ。二年目に入っつて、イベントをしないかという話になっつて、「宿場祭り」が誕生。この指たかれ方式のメンバーだったから、意見やアイデアがたくさん出で、絶対成功するなと確信できた。また、地域全体が認知してくれるものにしたという思いから、商店会長や町内会長に、こういうメンバーで、こうやりたいけれど、

近藤 博昭 (こんどう ひろあき) 氏

保土ヶ谷駅前ソバ屋「桑名屋」4代目/保土ヶ谷宿400倶楽部事務局長

保土ヶ谷宿400倶楽部発足を皮切りに「保土ヶ谷宿」をテーマに、さまざまな形で街づくりを展開。周りの人まで元気にしてしまうパワーで、地域にはなくてはならない存在となっている。東海道ネットワーク発足と「頼まれればイヤと言えない」人柄が相まって、その活動は今や全国規模。2001年に向け、フル回転の毎日である。

「広重の絵にある橋のたもとの二ハソバ屋がモデル」という本業の桑名屋は、下宿箱も宿場の名前で区分されているほどの念の入り様である。

どうだろうか、応援してほしいと説明に回り、実行委員会にも入っていた。もちろん、四〇〇倶楽部のメンバーが積極的に協力してくれたことは言うまでもない。

この宿場祭りも今ではすっかり定着している。とにかく、どこからこんなに集まってくるのというぐらい人が集まる。こんなに不景気なのに。特に今年はベイスターズの祝賀騒ぎもあつたし、ジャズブROMナードとも重なるし、人出に影響があるだろうと覚悟していたのに、関係ない。そこが東海道というCIを持った街の強みだと思ふ。街でも企業でも個人でも、これからCI、つまりテーマと特色を持ったところが元気を保てる。国際社会になると特にこの傾向が強まるであろう。

3 市民が街をつくっていくことの強み

① 一波にさからわず、しかし手を止めない
「まちづくり、一生やるんだよ。やめないの。ただ、熱いときと冷めているときはあるよ。だけどやめない。死ぬまでやめない。」私は、よくそう言う。四〇〇倶楽部も宿場祭りも波はある。しかし、その波に逆らわず、継続していけることこそ、市民自らの手で打ちまわす最大の強みなのだ。

行政や企業でも同じことはできる。できるけれども、常に一定の成果や効果が見えなければ、撤退を余儀なくされることもある。それは仕方がないことだ。

その点、我々なら長い目で捉えることができる。もちろん商店街や地域の活性化を目指す

して、いろいろな仕掛けをしているのだが、イベントという一過性のもののみに対する効果だけでなく、それを起爆剤として、次の時代につなげるまちづくりを考えることができるのだ。

二十一世紀に向けては、地域の人たちの意識が、いろいろな意味でもっと向上していかなければいけない。つまり、地域の責任も含めて、地域のあるべき姿というものを、みんなが持つて創造できるような地域づくりなしには、市民生活が成り立たないのではないかと私は考えている。

だから、今うまくいかなかったても、活動を継続することでより多くの地域の人たちに、まずは認知してもらおう、意識してもらおうことこそ重要なのである。

② 汗をかくことで見えてくること

―体験こそ最大の学習―

東海道五十三次シンポジウムも宿場祭りも、我々にとつてのコンベンションだが、それ自体がすぐに経済効果を生むかどうかは大きな問題ではない。もっと大きな目に見えない効果を包括しているからこそ、コンベンションは意義があるのだ。

保土ヶ谷に関していえば、少なくとも後継者は育っている。今や我々が仕切らなくても、二十代のメンバーがどんどん進めてくれる。

後継者がいるというだけですごい上に、彼等は汗をかいている。汗は財産である。そういう財産はみんな無駄にしない。それを見ている周りの人たちだって、決してふざけて汗をかいているのではないということぐらいわか

ほ ど が や わ が ま ち 3 9 0

1991 第2回

日時：10月5日(土)～6日(日)午前10時より

場所：保土ヶ谷駅周辺

主催：保土ヶ谷宿場まつり実行委員会

明日へのニューパワー!!

保土ヶ谷宿場まつり

協賛 持奈川興 横浜市 保土ヶ谷区 保土ヶ谷宿400倶楽部
保土ヶ谷区高速 横浜小売酒販組合 保土ヶ谷支所 地

■保土ヶ谷宿場まつり

東海道データベース

ほっ!? ど

東海道五十三次シンポジウム
保土ヶ谷宿大会
1995.10

もくじ

- 東海道五十三次進歩自任巻……1
- 三宿場物語……2
- 東海道保土ヶ谷宿アラカルト……5
- 保土ヶ谷(宿町区)のあゆみ……7
- 博物館とまちづくり……14
- 親近ING 東海道データベース……12
- OUTLINE OF HODOGAYA POST TOWN……32

や が

■東海道五十三次シンポジウム

かる。

小学校に昔話をしに行ったり、宿場祭りや何かのときには、意識的に小・中学生にお手伝いを願ったりしているのは、子どもたちにも体験してほしいからなのである。そういう子は保土ヶ谷にちりを捨てる子にならないものだ。

ことほど左様に、地域の人たちがいろいろな形で一緒に体験をすることで、立場は違っても、共通のペースができるはずだ。立派な言葉で理念を確立し、きれいなパンフレットで広報しても、地域の人たちには届かない。体験こそ最も効果的な広報手段なのだ。

つまり、主催している人も参加している人も、汗の意味を体で感じるができるということだ。そうすると、地域合意がほかの地域に比べて非常に詰めやすくなる。目指しているものが、具体的なイベント等で、誰にでもはつきりすればするほど賛成者も増える。そういう人が増えていくことが、十年後、二十年後の街にとって大きな価値になっていく。

私にしても、最初からそういう意識は持っていたわけではない。自分たちの責任というのをつくづく痛感するようになったのはここ二、三年だ。四〇〇倶楽部を始めた当初は、言葉では「歴史を生かしたまちづくり」と言っていたが、具体的には何も見えていなかった。想像もできなかった。実践する中で、ようやく見え始めてきたのである。

だから、我々の時代に街がよくなったねと言われなくてもいい。息子の時代で十分だと私は思っている。

4—さらなる展開に向けて

①—東海道という全国版を持つ幸せ

保土ヶ谷のまちづくりが恵まれている点は、新たな仕掛けがいらぬということだ。東海道五十三次という全国版の名前を持っているというところで、多の地域との連帯感がスムーズに生まれる。

品川に行ったり、大磯に行ったり、小田原に行ったりすると、宿場というだけで自然に友達感覚になれる。一生懸命融合を図ろうとしなくても、東海道という名前が接着剤になって、協働への意識づけができてしまうのである。

また、外から入る方も、特に保土ヶ谷に関係なくても、東海道に興味がある、宿場に興味があるという視点で、保土ヶ谷へ来てくれる。そういう感覚を大きな贈り物として保土ヶ谷は歴史からいただいているのである。

②—国際的規模への挑戦

今、国際化の波の中で、市民レベルの国際交流も盛んになっている。先日、遅ればせながら東海道もこの課題にも取り組んだらどうかという提案させてもらった。

あまり知られていないことだが、江戸時代も、日本には国際人が入ってきていた。外国人が大勢東海道を通っていたのだ。さらに、象やヒョウやトラといった当時日本ではお目にかかれなかった動物も、琉球通信使節や朝鮮通信使のときには、行列に加わっていた。

これに因んで、当時の行列を再現する国際仮装行列のようなものを作ったらどうかとい

う提案である。

実は長崎県の対馬で、朝鮮通信使パレードを体験してきたのである。向こうの民族衣装を借りて参加して、何となくそんな気になって、だから「日本人」というアイデンティティを明確に持たなければいけないということも教わった。それが体験でわかってくるのが市民感覚での国際交流になっていくのではないかと気付いたのであった。

東海道のみならず、横浜の最大の武器である海を渡って対馬とつなぐ、朝鮮半島へもつなぐ、そして、最終的には世界中とつなぐ。これが私の将来構想である。

5—おわりに—まちづくりは人づくり—

まちづくりの仕掛けも何年か経つと、マンネリ化ではないかという意見が出る。もちろん、様々な新しい企画は必要だが、マンネリに見えるような仕掛けも、初めて触れた人にとっては、新しいことなのだ。この新しい人へのアクセスが実は一番重要であると私は考えている。街づくりへの理解者と実践者の準備軍を大勢つくらなければ、いい街はできないのだ。万年初心者向けといわれようと、この基本を忘れてはいけない。「まちづくりは人づくりだ」なのだから。

歴史というアイデンティティを持つ保土ヶ谷の街で、たくさんのシーズを、それぞれに展開しながら、有機的に連携しながら、離れながら、今後も汗をかいていきたいと感じる今日この頃である。



■宿場祭りがごかきレース